

平尾 磨仙 著

明治日記

石 戸 谷 正 司

「神上双書」第二集として、第一集「谷の書」に続いて昭和四十五年一月、青森県立図書館によって発行された。原本は平尾磨仙の「明治日記」と題した和綴自筆稿本五巻と断簡へ弘前市立図書館所蔵を續刻したものである。自筆といつても巻一と五の全部と巻二の後半約五分の一が自筆のほかは、他人から譲りうけたものとを綴じたものである。

この本は、文久元年から明治三年までの約十年間にわたつての詔書、幕府よりの論達書、各藩主の達書、上奏連白書その他の所謂公的文書を収録したものであるが、その間に京都、大坂、江戸に駐の津軽藩士の末翰、風説書などが配列され内容を豊かなものになっている。著者の私見は一つもない。

原本についていえば、自筆の巻一と巻五はほぼ年代的に記録されているが、その他の巻は他人から譲りうけたものをそのまま綴じた関係もあり、年代、内容等も不統一である。内容は、一の冒頭に書かれた「卯辰日記」の題名を示すように、慶応四（明治元年）年の戊辰の四年の記事が中心となり、全巻の過半の分量を占めている。

各巻ごとに主な項目をあげれば、

巻一は、慶応三年の兵庫開港問題、大政奉還、京都の情勢、王政復古の大号令、江戸薩摩藩邸焼討事件、慶応四年の鳥羽、伏見の戦い、慶喜退討等。

巻二は、元治元年の筑波山拳矢、蛤御門の變、年代がとんで慶応四年の慶喜始め佐幕諸藩の処分、東征軍進発、明治二年の函館戦争のため青森滞留の官軍、函館戦争報告等、

巻三は「崎陽茶話」として天主教、邪教、邪教大變、長崎邪教始末、護国新論、続いて「近世日記」として明治二年の板垣退蔵の上表、慶応四年の慶喜退討令、庄内藩と隣藩との状況、関東における官、幕軍の衝突、会津及び奥羽各藩連盟の歎願書等。

巻四は、文久元年へ頒註の元治元年は誤植の間の八州の浮浪の徒の鎮圧、露艦ボサドニツク号対馬沖泊事件、老中松平重前守襲害事件、坂下門外の変、明治元年の三職と科制等。

巻五は、慶応四年の慶喜伏罪、謝罪書の提出、東北戊辰戦争関係記事、東北諸藩の処分等。

以上、文久元年から明治二年へ断簡が明治三年記事まで、その間僅か十年足らずの期間であるが、日本歴史全体の中でこのように激しい動きを示した時期はすくなくない。本書はこの激動、動乱の時代の記録である。勿論、

所収の記事の大部分は歴史資料として他にもみられるものであり、藩士からの書翰を武士という立場からの見聞記であり、風説の域を出ない類もあるが、この大変革が僻遠の東北人の目にどのように映じたかを知ることができよう。以下所収の記事のいくつかを紹介しながら大変革の時期を概観してみよう。

明治維新は国内の動きだけで起つたのではない。この変革を促進させるためには国際的な動きが大きな役割を演じている。慶応三年十月の大政奉還から十二月の王政復古の大号令までの間、幕兵と討幕兵双方は京坂地方に集結し殺気がみなぎっていた。十一月五日、イギリス公使パークスは幕府に対し、外国人と衝突のおそれがあるので軍隊を大阪から撤退してほしいと要求した。過去の外人殺傷事件や翌年一月の神戸事件、二月の堺事件の発主からみてもその要求は当然であった。「強て引払候様には難相成被侍候旨相答候処、左候はは横浜並香港等に罷在候兵卒多人数呼寄せ、自国人を警衛可致也外無之候間」(三〇五頁)と武力を背景にした強硬な交渉態度が伺われる。尚、小西六郎氏は「日本の歴史 一九卷」(中央公論社)の中で、この要求は、幕府の根拠地大阪より藩軍を移動させるという意味で、幕府を牽制し倒幕派の行動を有利にするためのものだとしている。

さらに、幕府とフランスの関係を示す記事として、工藤達次郎見聞書写の鳥羽、伏見戦の記事があるが「上様

大阪在城の時、同所大手前旅館へ仏人数百人相詰め、夜に下向度々登城候也、聞衆勢引払の節一同に引払候由」(六四頁)「今日異人又々上坂城中へ騎馬にて入りし様種々悪評御座候。」(六九頁)と報じている。長州再征が幕軍の大敗に終わったので、幕府は軍事力の増大をはかるため軍制改革に力を注ぎ、フランス公使ロッシェのすすめにしたがつて慶応三年春、フランス士官十八名の教官を来日し、歩・騎・砲兵の教育を開始され、同年末には歩兵七個連隊、騎兵一隊、砲兵四隊計一万数千人の軍隊が組織された。敗北を続ける幕軍の強化、援助のため大阪城へ公然と出入し、軍費を賈った様子が見える記事である。

つぎに、露船ボサドニツク号の村馬滞泊事件(文元元年二月三日から六ヶ月間、対馬芋崎浦に滞泊して容易に退去しなかつた事件)についての記事で「門番六人斃死仕、怪我人数多有之。……士とも八人足輕百と十人小八百人百姓四人は斃取……四日晝より六日夜まで打合及戦争此方三百四十四人即死、先方も死亡は多分有之哉に奉有候。」(一九三頁)という対馬藩主の報告があるが、事実は四月十二日、ロシア水兵の一隊が大船越村に上陸しようとしたのを村民が押しとどめようとした際、安五郎という百姓が狙撃され、胸をうち貫かれ陣死、また別の二人は捕えられたのであって、報告とはあまりにも相違している。ともあれ引用した三つの記事は、明治維新

という大変革が世界史と深い関連のもとにおかれたということを物語るものである。

つぎに巻を追って主要記事を紹介しよう。

大政奉還をめぐって京都は騒然としていた。「只今平馬（西館）殿御殿より御退下に付御模様承候処、將軍様には御辞職御願之通被仰出候由。誠に仰天至極に御座候。別紙伝奉致の所は外公家致不残参内、御辞職願之通下仰出候ては只今爭乱に相成可申、既に西藩多人数四方之山々江潜伏罷在、少しも猶予に候ては、炮発に及可申、勢出下降止事御辞職被成候事の由。此後天下は如何相成候ものか、可も難尽望紙追々可申上候。」（二二頁）

即ち、事態は「誠に仰天至極」で「此後天下は如何相成候ものか」武力倒幕計画の関係者はともかく、幕府は「何論」公卿、諸侯も事態の推移を拱手傍觀するだけだった。大政三奉還された公卿達も慶喜を日し朝議を開き、また、在京諸藩重臣に諮問し善後措置を協議したり、慶喜に暫く度政を委任するとか、十月二十一日には討幕実行猶予を薩長に申し渡したりした。將軍職辞表をうけて諸侯上京まで待つべきと指示したが、朝廷の召に応じて上京したのは京都付近の小藩主や薩、芸、尾、越の有力藩主あわせて十数藩で、上京の朝召を辞退していいものかどうかに幕府に伺いを立てた藩がほとんどの藩にも及ぶ地味であった。

やがて、大久保、西郷、岩倉等の武力倒幕派の断乎に

る決断により、十二月九日、王政復古の大号令が出され、同夜の小御所会議で慶喜に辞官、納地を命ずることが決定された。会津、桑名二藩は禁門守備を解任、帰国を命ぜられ、薩、芸、土、尾、越の藩兵によって御所の各門は固められた。

十二月九日の事件については、京都より早稲脚持参風説書（四二頁）や十二月九日監覆官藩人数警衛の一件（四四頁）が次のように報じている。「去九日（十二月）なり」会津守護屋敷不残引松に相成、御家中並御家内子供数銘に風呂敷巨背負、長刀又は大小帯し、何れ江参候哉、五六人十人連、下部には巨物為持、九日中に河方へ参候哉、恩うに立退に相成、会津藩致は二兵御城内江被為入候由風説に御座候、御役御免に相成候由。」「屋へ」時頃羽色騒然として衆慮恐懼し、東西へ奔走し、各藩の人数何れも非常の姿にて大小砲を携へ、頻に御所内に入込み、第一には薩州の人数三百余人、大小砲を構え、」時に公家初め町家杯の男女老稚相抱いたし、月夜に霜を踏つて田舎へ江退き牛車運送の音夜終不絶実に愁事に御座候。」

十二月九日のフリーテターに勝利したとはいえ倒幕派の勝利は不安定であった。即ち、山内容堂、松平春嶽らの公議政体派が考えていた慶喜親班の諸藩連合政府実現の可能性が、その後の宮廷工作によって濃くなり、小御所会議の決定が完全に骨抜きにされた。まさにこ

の時、江戸薩摩師範討事件が起つた。この事件について「慶應三丁卯年十二月江戸騒擾の一件」(五八頁)が詳細に報じている。(記事省略)

この事件発生によつて舞台が一転し、幕府は西郷ら武力倒幕派の挑発によつて島羽、伏見の戦いと破局の道を歩でことになる。

工藤峰次郎見聞書写は、この戦いの発端と戦況を報じたのち、旧式武士軍が新式銃砲隊に勝てなかつた理由の一つとして次のように書き記している。「尤三藩(薩、土、長)の人数稀に小手騎当等相用い候者御座候得共、多分は筒袖股引着用、別して長州勢は下残異人同様の服に御座候。兵器は不残二つバンドのミニケールを携へ鎗を時々の兵は一人も無之、大砲は台車附四斤の筋引筒に御座候。白では三日三夜の戦い短剣の勳一ヶ処より無之、余は悉く砲戦にて勝敗取究り候由。夫に三藩の人数は難矢一人も無之、密集隊にて繰出し、戦の場に至り候得共、十騎廿騎つゝ、相分け散隊の勳致候由に御座候。」(六〇頁)

この戦闘中、現職の老中を藩主とする淀藩は、敗走し淀城に陥ろうとした幕軍の入城を拒否し、また、山崎を守護していた津藩兵が寝返りをつた。すでに先代將軍家次の出身藩である紀伊藩、大老井伊直弼の嫡子彦根藩は反幕側にまわつていたが、幕府の命運に見切りをつけた多くの藩は引き剥がれ、如く幕府を離れていった。そこに

歴史の大きな流れを感じずにはおかない。村上長次郎、織田寅五郎より江戸勘定奉行運末状の写(正月十六日付)鮮明にこのことを記している。「就ては御親藩に候共、無晩時勢尾越をばじめ御譜代彦根郡山も官軍と相成、其余の小藩は尚更の義、紀州も兼て佐幕主張と有之候得共、前書戦争の節は傍觀いたし、此即官軍に相成候由……」「外様御譜代各藩共在様大事と王命との二つに寄り、悉く官軍に相加り、当前朝廷の御勢い日の昇るが如く、関東之義は下知候得共、其相東西南北一吸塵かぬ草も無之体に見見得申候。御地の義は如何の動靜に御座候哉。」(七八頁)

卷三の「天主教」「耶蘇教」「護国新論」についていへば、安政六年の開国後、渡来した宣教師達は幕府が依然として切支丹禁制を行なつていた為に、急激な直接伝道こそできなかったが、中国文の著訳書の訓点本や和訳本が出版され、漢字の素養のある士族が読んだことが推測される。しかし、西洋参観、切支丹邪宗门は依然として民衆の心底深く潜んでいた。平田派の国学を学んだ著者がこの巻に排耶論を紹介したのは偶然ではない。「長崎邪教始末」は文意から慶応四年に書かれたものと思われる。その中で、幕末期の浦上付近の切支丹信者数、潜伏切支丹の発見、七十余人の逮捕、信仰の堅固さについて書かれているが、新政府によつて右弾圧は続き、明治二年十二月、浦上の信徒を捕え、三千余人を西国の諸

藩に配流した。切支丹禁制高札が撤廃されたのは明治六年二月である。

巻四に、坂下門外の變の詳細記事があるが、同巻の一九四―一九五頁に、この事件の六ヶ月前に起きた老中松平重前守信義暴虐事件が収録されている。大事にいたらなかつた為か、あまり知られていない事件である。

巻五は、慶応四へ明治元へ年の東北戊辰戦争の記事が中心である。文久二年、京都守護職となり幕末政局に江幕派の重鎮として活躍した会津藩、関東廻廻役として江戸薩摩藩邸邸討をした庄内藩が政府軍の討伐をうけることになった。東北諸藩は、この両藩に同情した仙台、米沢の大藩を中心に、慶応四年五月三日、奥羽越列藩同盟を結成、「羽州の奸」薩長を除く戦いにたちあがった。列藩同盟のリーダーの思想については次の記事が端的に説明している。即ち、「前に奸臣太樹に迫りて職を辞止しめ幼帝を擁して権を震ひ勤王と号して諸侯を欺き執政を唱へて関東を襲んとし、千々之邦内に勤がして民の塗炭を覆す。割禁閥の傍臣豈幼君を廢にするに非ず哉。王政復古之名義何の処にかある。呼々仙侯の貴戚感に堪ず。王位の臣と称する者其奸慝面に余れり。警備兵十萬に光を輝すとも元これ奸奴の蔽護一度放屁して破滅せん。大小のへ々字にして苟も國家の安偷に泥み、旧来の恩遇を定して弓矢汗馬の祖先を恥しむる事勿れ。呼々会津侯実に天下の英雄万代の龜鑑なり。興廃は時の運、王政に座

して死するが如し。豈奸賊に組する輩は安偷を欲する大逆に非ずや。徳川を助けて神君の政を旧に復し、數百年來の恩遇を報ずるは皇國の恩にして眞の勤王といふべきなり。」(二五三頁)

この思想は、幕藩体制を維持しようとする佐幕派の抱いたものであり、東北戦争終結まで一貫して保持されたものである。朝廷の御勢ひ日の昇るが如く、東西南北一版廓がぬ事も無之体に見える天下の形勢とは逆に、幕藩的名分論に拘じていつた佐幕藩、また、周辺の軍事的、政治的情勢に左右され、藩内の勤王・同盟兩派の指導権とからみあつて奥羽、越列藩同盟に加盟し、あとで離脱して官軍に参加した藩など、苦悶する東北諸藩が、絶対主義的名分論によつて圧伏されて行く過程を記したのである。

最後に、本書の性格、編集の動機および収録された公的記録を窺見し得た事情を、巻末で魯仙研究家の森山泰太郎氏が、当時さまざまな風聞が記録され転写されて巻間に区まつた風説書があつたが、本書はこれと多少に似た要素を右つたものであること。そして編集の動機は、動乱の世相を鮮明かに感じ、世の興衰を急変を筆にのぞくには居られなかつた魯仙の記録癖からであらうこと。また、民間人に過ぎない彼が公的文書と窺見し筆記し得たのは、本藩戊辰資料編集関係者であつた下沢保躬、兼松成言らと好學の士であり、親友であつたことを挙げて

いることは正鵠を射た見方だと思ふ。

青森県立図書館郷土双書二

青森県立図書館協会発行

頒価 六百円 送料 四十五円